

『東方』三〇四号より

抵抗と協力のあいだに

大澤 肇(東京大学大学院)

日中十五年戦争における「満洲国」以外の中国占領地については、系統的な研究が少ないのが現状である。特に戦時期上海についての研究は膨大な史料の割には、研究が進んでいるとはいえない。こうした状況のなか、二〇〇一年から行われた日本上海史研究会の共同研究「日中戦争期の上海に関する歴史的研究」の研究成果として出版されたのが本書である。

本書に収録された研究の多くは、本研究会の中心であり、日本における戦時上海及び汪精衛政権研究の第一人者であった古厩忠夫(二〇〇三年永眠)が提唱した諸概念をモチーフとしており、本書の巻頭には総論の代わりとして、古厩の過去の研究が高綱博文によって系統立てて紹介されている。高綱が紹介した古厩の研究のうち、重要な視点は以下の二点だろう。第一点が上海(特に共同租界)を中国の抗戦拠点の一角として再評価し、日中戦争に果たした機能を正当に評価したことである。第二点は戦時下における地域エリートのネットワーク関係と対日協力を、「漢奸―抗日」という図式ではなく、地域エリートたち自身の論理で考察しようとしたことである。

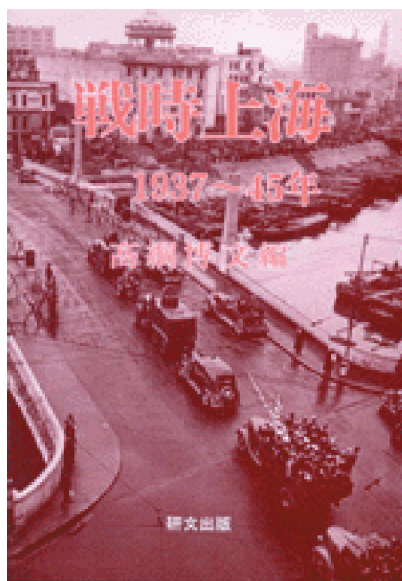
上述した、古厩の研究紹介を総論部分として、以下本書では十一編の論文が収録されている。ここでは順に内容を紹介していきたい。

高綱博文「日本占領下における『国際都市』上海」は、こ

トップページにもどる

高綱博文編

『戦時上海 1937～1945年』
A5判・四二八頁・研文出版・六、八二五円



れまで一九四一年一二月の日本軍による共同租界進駐を機に「国際都市」上海は終焉したとの見方に異議を唱える。ここでは、共同租界進駐後も現状維持政策が採られて多種多様な外国人が居住していたことを実証し、一九四三年の「対華新政策」による租界返還後は、英米などの敵国人は集団生活所に収容されたものの、ソ連の宣伝工作など中立国の活動は取り締まることが事実上困難であったことを指摘する。

今井就稔「戦時上海における敵産処理の変遷過程と日中綿業資本」は、日本軍による中国資本紡績工場の占領、それら工場の「委任経営」という形で日本資本のさらなる進出、一九四三年の「対華新政策」(注①)によるこれら工場の返還という過程を描き、そのなかでの日本側(大東亜省、軍、在華日本資本、アジア主義者)と中国側(汪政権、中国資本)の、諸政治アクターの複雑な協力と対立関係を

描き出した点が優れている。

俞慰剛「日本占領下における上海都市管理体制の変遷」は、日本占領下における上海都市統治機構と法令の変遷、当時の上海市政権には一貫して日本軍特務機関による指導があったことを述べ、その「傀儡性」を指摘する一方、その「傀儡政権」による治安管理や公共衛生の近代性を評価する。

孫安石「日中戦争期における上海総領事館警察」は、『外務省警察史』をベースにしながら、これまであまり触れられることのなかった領事館警察という組織が、一九三〇年代に拡大していく様子を描いたものである。そのなかでは、軍事行動における協力体制を実証し、日本人保護から日本占領地の治安行政機関へと変貌を遂げる過程を緻密に描いた点が優れている。

菊池敏夫「戦時上海の百貨店と商業文化」は、一九二〇年代から上海、特に南京路に発展した百貨店を取り上げ、商業活動において幅広い社会階層の取り込みに成功し、「孤島」期の繁栄を経て、アジア太平洋戦争時期においても、支店の開設や投資活動など活発な経営を行っていたことを述べている。

岩間一弘「戦時上海の聯誼会」は、当時上海の俸給生活者層が結集した、娯楽や福利厚生事業を目的とした聯誼会という組織に注目した研究である。聯誼会の催した娯楽やスポーツ活動では愛国心の高揚が図られる一方、聯誼会には俸給生活者層のみならず地域エリート層も関与していたこと、社会や政治批判も行うことができたという点で、一種の「市民団体」であると結論づけている。

邵迎建「上海『孤島』末期及び淪陷時期の話劇」は、戦時下上海での娯楽として、数量的に話劇（現代演劇）が映画

トップページにもどる

を上回っていたことを実証し、また当時の話劇には中国人しかわからない独特の言い回しや愛国心に訴えるプロットなどがあり、それが観客の動員につながったと述べている。陳祖恩「日中戦争期における上海日本人学校」は、戦争の最前線に置かれた、上海日本人学校の戦時教育の実態を描いたものである。

鈴木将久『対日文化協力者の声』は、作家兼自然科学者であり、大東亜文学者大会にも出席した陶晶孫を取り上げ、彼のテクストを詳細に検討することで、陶が三〇年代から日本占領下を通して敗戦まで、あらゆる政治アクター（日本軍、日本文壇、尾崎秀実のグループ、中国共産党）を相対化しつつ微妙な距離と関係を保ちつづけていたこと、ロマン主義的文学観を一貫して持っていたこと、そして新しい中国のための言語創造活動と衛生研究への邁進を明らかにし、陶が彼独自の方法で中国近代化の問題に格闘したことを、「単なる抵抗でも単なる協力でもなく、その両者をともに斥けて隘路を歩み通す覚悟に満ちた道であった」と評価する。

小浜正子「日中戦争期上海の難民救済問題」は、上海戦に伴う難民発生と救済の問題を扱った研究である。日本軍が難民救済に冷淡な態度を採ったのに対し、地域エリートを核とする上海の社団ネットワークは積極的に難民救済を行ったとし、その過程を丹念に追っている。そのなかで、従来の社団ネットワークによる慈善事業とは異なり、国民政府の強い援助とイニシアチブがあり、人道主義と抗日ナショナリズムが一つになって上海社会に浸透していった点を指摘している。

石川照子「日本の大陸政策と上海日本人YWCA」は、日中戦争期における日本YWCAの上海進出の論理と、文

化政策遂行という役割を考察したものである。

以上、本書の内容を簡単に紹介してきた。本書の評価されるべき点として挙げられるのは、まずは何といつても日中双方の一次史料を用いて当時の上海社会の様々な実態を描き、多面的な角度から戦時上海の実像に迫った点にある。今井論文は、戦時上海社会の重層性を描き、愈論文は暴力的に押しつけられた支配の一面にある近代性を描き、菊池論文は消費都市としての上海を描き出している。

また先行研究として古厩の提起した枠組みを充分に生かして継承し、その有効性を実証した点も評価されるべきだろう。高綱論文は四一年以降も共同租界の独自性が続き、必ずしも日本の支配が貫徹しなかったことを実証し、鈴木論文は陶晶孫の孤独な歩みに「漢奸―抗日」という図式に当てはまらない文化人の姿を見出す一方で、邵論文は観劇活動に日常的抵抗を見出した。さらに岩間論文、小浜論文はそれぞれの研究の蓄積と、古厩の地域エリートのネットワーク論、そして公共領域論を踏まえたうえで戦時下への移行に伴う人的結合の変化をうまく捉えている。

とはいえ、問題点もないわけではない。評者が最も気になったのは、本書は「上海」という地域を研究対象としているが、多くの研究で実際に取り扱っている地理的範囲が、租界地区に限定されているという点である。確かに戦時上海における租界の独自性や機能は詳細に分析され、評価される必要があるだろうが、上海は租界以外にも広大な中国人居住地域や郊外といった後背地を抱えており、これらの地域に対して、戦争や占領といった事態がどのように作用したのかは、日中間において歴史認識が問題になっている現在こそ、より細かく見る必要があるのではないかと思わ

▶ トップページにもどる

れる。例えばカナダの研究者ティモシー・ブルックは、その著書のなかで、福建人主体の大道政府に対する、上海郊外の地域エリートの競争意識と対立を、日本軍がうまく利用した事例を指摘しており(注②)、ミクロな視点からの、上海の社会階層やエスニックグループの連続性と変容についての示唆を与えている。

また、よりマクロな視点から見れば、上海が日本の「戦時帝国」(注③)に組み込まれることによって、「帝国」内各地からどの程度、どのような人々の人口流入があったのか、それによって上海社会はどのように変化したのかについても、「国際都市」上海を研究するうえでは軽視できない事項であろう(注④)。

但しこれらの問題点は、本書に収録されている研究の価値を引き下げるものではなく、むしろ各研究の密度が濃いゆえに目立つと言えるものである。なお、日本上海史研究会では本研究を基礎として現在、戦後及び中華人民共和国建国以後の上海社会の変容についての共同研究を行っている、今後の成果が期待される。

【注】

①戦況悪化にともない、一九四三年から汪政権の自立性を高める方向へ、日本側から新しい政策が打ち出された。結果としては、租界や工場の返還、治外法権撤廃などが行われた。

②Timothy Brook, *Collaboration: Japanese Agents and Local Elites in Wartime China*, Harvard University Press, 2004

③「戦時帝国」概念についてはP.Duus, H.Myers, M.R.Peatie, *The Japanese Wartime Empire, 1931-1945*, Princeton University Press, 1996などを参照のこと。

④本書には収められていないが、上海の日本人社会については高綱博文らの優れた研究がある。参照のこと。